

青経塾生にとって誉れ高い遠山賞。

その受賞者の方の会社経営から、学ぶことも多いはずです。

業績を飛躍的に伸ばされたヒント、さらなる豊富など、

近年の受賞者の限らない力を、インタビューさせていただきました。



No225 / 平成16年受賞

有限会社 新宝運輸

代表取締役

田中 功二 氏

(第34青経塾)

新たな出会いと喜びを

「遠山賞をいただいて、塾生の見本にならなければいけない」と強く責任を感じています。そして遠山塾主に一歩ずつでも近づいていきたい。」

父から引継いだ運送業務は、それまでの遊技関連からスーパー向け生鮮食品配送の仕事へと拡大し、業績は急成長していった。次第に現場から離れることが多くなり部下任せの経営になっていった。しかし転機が訪れた。信頼していた幹部社員が独立し、多くの従業員と顧客を失った。業績が急速に悪化、資金がショートして、一時は事業継続を断念するところまでいったという。しかし、残った従業員の熱い思いと、取引先の支援を受けて再生に向かっていった。

その頃に青経塾を紹介していただき、入塾説明会に参加した。勢いばかりでやってきた自分には、学ぶことを必要と感じて、その場で入塾手続きを済ませた。2年目までは出席できないこともあったが、そのかわりに自分にできることを見つけて積極的に活動してきた。気持ちが乗らない時期に「人にできてお前にはできないのか」と副塾長から喝をいわれて目が覚めた。Pとして長岡研修に取り組み、ゼロから一つずつ積み重ねていくことを体学して大きな成長を得ることができた。その頃から「階段は一歩ずつ登るもの」という父の言葉が理解できるようになったという。卒業と同時に副塾長を拝命した。「人の為に何ができるかを考え、自分をもう一度見つめなおしたい」という思いがあったからだという。塾生一人ひとりが社会に役立つ経営者になってほしい、という思いで後輩の指導にあたっている。

遠山賞を胸に、物流を通して全ての人に新たな出会いと喜びを提供し続けていく田中氏。その全身から発せられるオーラは、困難を乗り越えてきた決断力、行動力、使命感が作り出していると感じた。(第36青経塾 柴田裕二郎)

心技鍛錬

タカハシテクニカ株式会社は、工作機械部品や航空機部品などの精密部品加工を得意とする。社歴は古く、ルーツは大正元年まで遡る老舗の会社である。高橋氏が先代から事業を継承し、4代目の社長に就任したのが今から3年前。その当時の経営状況は、決して順調ではなかったという。

高橋氏は就任するや否や、大胆な改革を次々と実施に移した。「社長として自分のすべきことは分かっていた。それを、一つひとつ確実に実行してただけです。知行合一です」人事の一新、工場の再編成と更なる設備投資、営業の強化。絶え間ない改善が効を奏し、今期は社長就任当時と比較して、ほぼ倍増の売上を見込んでいる。

そんな改革の中でも、特に人材育成には力を入れる。「心技鍛錬」という経営理念が示す通り、会社とは社員一人ひとりが成長する場であり、日々の心と技の鍛錬こそが最も重要であると考える。実際に、職場のベテラン社員を講師にして、定期的に技術講習会を行ない、製造業の命とも言える『技術』を、後進へと伝承する場を作っている。驚くべきことに、この講習会は社外へも広く開放されている。「日本の製造業の加工技術は、大変優れている。この『技術』を守っていかなくてはならない」製造業に携わる者としての強い使命感が、この言葉に表れる。「遠山賞とは「誉れ」そのもの。賞に恥じない経営者になりたい」と語る高橋氏。自らも塾長という立場で、日々、「心技鍛錬」に励む。その夢は、「上場、そして日本一の加工業者になる事」この明確な目標へ向け、遠山賞を通過点として、挑戦はさらに続く。

高橋氏の貪欲に学び、そしてその学びを『そのまま』実践している姿に、深く感銘を受けた。そして、知行合一の大切さを再認識した取材であった。(第34青経塾 浅井勇詞)



No 208 / 平成15年受賞

タカハシテクニカ 株式会社

代表取締役

高橋弘茂 氏

(第36青経塾)